オイディプスの呪い

――古代の精神――

下島　連

テバイのカドモス王家を襲う神々の怒り、父殺しの罪はやがて兄弟同志討ちの悲劇を呼び、この王家は滅亡する。これは古代ギリシア人によく知られていた神話であって、ギリシア悲劇に多くの材料を提供している。

当時のギリシア人はこの一族の悲しい歴史を見つめて、神々の意図は人間の思慮を越えたものであること、運命の神々の決定は避けられないもの、デルポイの神託にそむくことがどのような結果を招くか、また祖先の罪のために子孫がどのようなネメシス（報い）を受けるかを、恐れとおののきを以って感じ取ったであろう。

幸いにしてソポクレス（前四九六―四〇六）の「オイディプス王」、「コロノスのオイディプス」、アイスキュロス（前五二五―四五六）の「テバイ攻めの七将」、ソポクレスの「アンティゴネ」という四つの作品がかなり完全な形で現代に伝えられているので、われわれはカドモス王家を見舞った悲劇の全貌をギリシア劇最盛期の二大作家の傑作によって読むことができる。

これらの作品は神々を忘れて軽薄もしくは驕慢になっている現代人には縁のない世界を縁のない方法で扱っている

下島　連

ように思われるかもしれないが、読んでみると、これらの作品は時間と空間を越えてわれわれに語りかけて来ることが判るであろう。今に変らない人間の美しさ、哀れさ、愚かさを描いてその訴える力の強烈さは比類がない。それは驚くべきエネルギーだ。それはエーゲ海の海鳴りのように今なおとどろきつづけている壮大な声である。先年来日したアテネ国立劇場の古代ギリシア劇の公演を見てこの感をいよいよ深くし、これは崇高さにおいて人間が造り出した最高の芸術の一つであると納得した。

残念ながら私にはギリシア語は読めない。また古代ギリシアの社会や文化について素養を持っていない。したがって、私の理解は限られているかもしれないが、翻訳（主として英訳、ときどき日本語訳を参照する）を通してこれらの作品に接して深い感動をおぼえた。ここで翻訳論を展開するつもりはないが、英訳の方が日本語訳よりすぐれていることは確かだ。なんと言ってもイギリスにはチャップマンに始まる三百五十年以上のギリシア文学翻訳の歴史があるからである。ともかく、英語訳によってではあるが、非常に面白く読めるということだけを述べておく。そして、なんの予備知識なしに十分に面白く読めるという事実の方がこの場合大切ではないだろうかと独り合点している。文学は本来そういうものなのだ。

文学作品には、その背後に一定の世界観というか、ばらばらな事件を統一する一定の原理のようなものがあるようだ。現代文学の問題点はこの統一原理が衰弱して、ばらばらなものが、ばらばらのまま投げ出されていることだ。ギリシア悲劇を支える宗教観、シェイクスピアーを支える強い道義観といった超個人的な原理なしにいかにして大文学が存在し得ようか。

それはさて措き、ギリシア悲劇は神前の祭祀として発生したという事実によって宗教的色彩がきわめて濃厚である

（この点についてわが能楽の起源が思い起される）。年々ディオニュソス祭に発表されたこれらの作品はアイスキュロス、ソポクレス、エウリピデスの時代に至っても神祭りの行事であるというその本来の性質を失っていない。神々の威力を讃えること、神々の怒りがいかに恐るべきものであるかを人々に指し示すことがこれらの悲劇を貫く厳粛な精神であり、その精神が一つの雰囲気となって舞台全体を包んでいる。この点に関する限り、多神と一神のちがいこそあれ、ギリシア悲劇の世界は旧約聖書の世界と一脈相通じるものがあるようだ。これが古代の精神というものであろう。

カドモス家の悲劇はオイディプスの実の父、テバイのライオス王がアポロンの神託にそむいたことに始まる。「お前の王国を救いたかったら、子供を儲けてはならぬ。なんじは自分の子供の手にかかって命を奪われる運命にあるからだ」というアポロンの神官の警告に耳をかさず、ライオス王は王妃イオカステと交わって男児をあげた。「愛慾が彼を征服した」とアイスキュロスは歌っている。ライオスにとって愛慾の力は抵抗しがたいものだったので、彼は結局神の警告――これは随分無理な難題のように思われるが――にそむくことになった。

以下さきに挙げたソポクレスとアイスキュロスの作品によってカドモスの家を襲った悲運をたどることにする。

ライオス王は旅先で何者かに殺害されたと報告されているのみで舞台には姿を現わさないので、舞台の中心的地位を占めるのはオイディプスである。「テバイ攻めの七将」と「アンティゴネ」はオイディプスの呪いのもとに展開する同族間の悲劇である。そして「アンティゴネ」の最終場面でこの一家は全滅し、神々の怒りがおさまる。いな、おさまるというより、もはや怒りの対象となるべき者が存在しなくなる。

ソポクレスの「オイディプス王」はアリストテレスが「詩学」のなかで度々言及している作品で、もっとも完璧に構成された作品であると見ている。意外な恐るべき事実がつぎつぎと明らかになってオイディプスとイオカステを恐

怖と絶望のどん底に追いつめるプロセスには寸分のゆるみがなく、その手腕のたしかさはただただ感嘆のほかはない。

この劇が始まるとき、オイディプスの父殺しの罪はすでに犯されているのであるが、そのことを知っている者は一人もいない。オイディプス自身も放浪中に道をゆずる、ゆずらないといった争いがもとで殺した人物が実の父であるとは夢にも思っていない。さらに放浪をつづけているうちにオイディプスはテバイに辿りつく。突然国王を失ったテバイの人々の不幸に追い打ちをかけるように、スフィンクスの災いがテバイを襲っていた。人面獣身のこの怪物は道行く人々に謎をかけ、その謎を解けない者をことごとく殺すのであった。人々が不安と恐怖におののいたのは当然である。オイディプスは抜群の知力をもって、「朝は四本の足で歩き、昼は二本の足、夕方は三本の足で歩く動物はなにか」という有名なスフィンクスの謎を「それは人間である」と解いてテバイをスフィンクスの災いから救い、その救世主のような功績によって、推されて国王の位につき、故ライオス王の妃イオカステを実の母とも知らずに妻として二人の王子と二人の王女を儲けた。(当時のギリシアでは女子は十五歳ぐらい、男子は三十五歳ぐらいで結婚する習慣があったらしい。そうすると、母と息子の結婚はわれわれが漠然と想像するほど年令的に無理ではなくなる。) 人々はオイディプス王を救国の英雄としてあがめ、テバイにしばし平和の小康が訪れた。

しかし、人間には読めなくても、この平和が永くつづくはずはなかった。父を殺して王位につき、母と交わって子を儲けた男が——たとえそれが運命の神によって計画されたものであっても、そして本人がその不自然きわまる異常に気がついていなくても——許されるはずがない。テバイの国土はいまわしい罪によって汚されていたのだ。その報いとしてやがてはげしい疫病がテバイを襲った。穀物は実らず、家畜は斃れ、女たちは子を産む力を失なった。ゼウスの神官を先頭に病み衰えた老若男女が宮殿の門前につめかけ、スフィンクスの謎を解いた賢明な国王の力にすがり、

この国土からこの疫病の災いを払い清めていただきたいと哀願している。これがソポクレスの「オイディプス王」の冒頭の場面である。

これに答えるオイディプスは民衆の不幸をわが不幸と感じる堂々たる王者の風格をそなえて現われ、「わしはかねてこのことを憂えて、神意をうかがうためにすでに王妃の弟クレオンをアポロンの神殿につかわしてある。おっつけ帰って来る頃合だ」と答える。そこへクレオンが戻って来て神のお告げを伝える。

クレオン「ライオス王を殺害した者をさがし出して追放せよ。そのことが実行されないかぎり、この国土から汚れは消えない」

オイディプス「王の殺害者はどこにいるのか」

クレオン「神託によれば、この国内に」

オイディプス「ライオス王はいったいどこで殺されたのか」

クレオン「巡礼に出かけられたままお帰りがないのです」

オイディプス「同行者はみな殺されてしまったのか」

クレオン「一人だけ逃げ帰っています。その者が申すには、ライオス王一行を襲ったのは山賊の群だそうです。一人ではなく多勢の山賊が……」

これを聞いてオイディプスは草の根をわけても殺害者をさがし出して、この疫病の災いを払い清めることを民衆の前で誓う。

すべてを知っている盲目の予言者テレシアスが呼び出されて、オイディプス王との間に息づまるような問答が交わ

される。

オイディプス「そちはなにもかも知っているのではないか。ぜひともその下手人を知らせてくれ。そしてこのテバイと、このわしを救ってくれ」

テレシアス「知って益なきことを知ることが、いかに恐ろしいことであるか。わしはこのことについてすべて承知しているが、それを口に出すことはできない。絶対にできない。ここをこのまま立ち去らしてもらいたい」

テレシアスは王の問いに答えようとしない。王は激怒する。

オイディプス「言え、言わぬか」

テレシアス「初めに申した通りです。おわかりになりませぬか。では致し方ない。はっきり申し上げましょう。ライオス王を殺害したのは、オイディプス王、あなた御自身です」

オイディプスはライオス王は一人ではなく、山賊の群に襲われて殺害された、と聞かされていたので、テレシアスのこの重大な言葉をまともに理解することができない。もしかすると、これはクレオンが自分を追い出して王位につくためにテレシアスと仕組んだ芝居ではないかという、きわめて人間的な疑念をおこす。人間はこのような疑念に取りつかれやすいものだ。

テレシアスは謎めいた言葉を残して立ち去り、クレオンが登場する。オイディプスは激しくクレオンをせめたてる。クレオンは身におぼえのないことと弁明するが、オイディプスの疑いは晴れない。両人がはげしく口論しているところへ王妃イオカステが現われて、ひとまず弟クレオンを引きさがらせ、オイディプス王と王妃との間に重要なやりとりが始まる。

イオカステ「王よ、なぜそのようにお怒りなのです」

オイディプス「テレシアスがライオス王を亡き者にしたのはこのわしじゃと申すのだ」

イオカステ「そのことでしたら御心労にはおよびません。かつて神託がありました。ライオス王は、この私との間に生れた息子の手にかかって命を落すというアポロンの神託が。聞くところによりますと、王は三本の道が出会うところで山賊の群に襲われて亡き者にされたとのことです。一方、ライオス王は私たちの息子を生れてまだ三日もたたぬうちに留金で足首をさし貫いた上で、家来に命じて荒野で殺させました。こうして、アポロンのお告げにあったようなことは実現しませんでした。気にかけることはございませぬ」

オイディプス「妃よ、その話を聞いてなんとこの胸のさわぐことか。三本の道の出会うところでライオス王は難に遭われたと申したな」

イオカステ「そのようなうわさでございます」

オイディプス「いったいそれはどこの土地で起こったのか」

イオカステ「ポキスと申す土地です。デルポイとダウリスから来る道が合わさるところ」

その道のことを聞くと、オイディプスには思い当たることがあった。オイディプスは矢つぎ早にイオカステにきいた。「それはいつのことか？　ライオス王の背の高さは？　年の頃は？　一行の人数は？」そしてイオカステの答えはオイディプスのもしかしたらという疑念をますます確かなものにした。

オイディプス「妃よ、あなたはそれを誰から聞いたのか」

イオカステ「ただ一人無事に帰って来た家来から。その者は帰ってみると、あなた様がライオス王に代って国王の

地位についているのを見て、私にひまをくれと申し、今は人里はなれたところで羊飼をしています」

オイディプス「では、さっそくその羊飼をここに呼びなさい」

イオカステ「そのように致します。ですが、なにとぞ、あなた様の心の重荷を私にもお聞かせください」

オイディプス王は物語った。「わしの父はコリントス王ポリュボス、コリントスにあってわしは高い地位についていた。だが、ある日の酒席である者がわしは父親の本当の子ではないともらした。この言葉がわしの心に重くのしかかった。そこでわしはひそかに国をぬけ出してデルポイの神託をうかがいに行った。わしはコリントス王の本当の子であるかどうかを確かめたかったのだが、神託はわしの問いには答えないで、世にも恐ろしいお告げが返ってきたのだ。わしは実の父を殺し、その上、実の母と交わって子供を儲ける運命にあるというのだ。このことを聞いて、わしはコリントスの父母のもとから遠ざかる決心をして、諸国をさまよい、ライオス王が命を落したという場所へやって来たのだ。そして、争いの原因はちょっとしたことだったが、自分の身を衛るためについある旅人とそのお伴の者たちを殺してしまった。この人物が万一ライオス王だとしたら、わしほど呪われた人間はこの世にいない。わしはわし自身の敵だ。わしはわし自身をこの地から追放しなければならない」

「国王よ、これはいかにも重大なことであるが、かの羊飼が来るまで望みをすててはならない」とコロス。

オイディプスはライオス王は一人の男に殺されたのではなく、山賊の群に襲われたという知らせをたのみとするほかはない。恐怖のふちに立たされて、不安におののくオイディプスを慰め力づけるイオカステの言葉の美しさと哀しさ。

そこへコリントスから使者が着いてポリュボス王の病死を伝える。それはオイディプスにとって悲しい知らせでは

あったが、同時に救いでもあった。今や彼は父の殺害者になるというアポロンの神託から解放されたと思ったのだ。しかし、その安堵も束の間のこと、使者の口から、オイディプスはポリュボス王の実の子ではないこと、使者自身がキタイロンの山中で別の羊飼から幼子をもらい受けたこと、その子の足首には留金がさし貫いていたこと、子宝にめぐまれないポリュボス王の御殿にその子をとどけ、その子はコリントスの王宮で王子として育てられたこと――使者は一気にオイディプスの生立ちにまつわる秘密を明らかにした。

もう一つのことが明らかになれば、すべてははっきりするのだ。その結果が彼をどのような恐ろしい破滅に導こうとも。「知って益なきことを知ることがいかに恐ろしいことであるか」という盲目の予言者テレシアスの言葉がこだまする。幼児の足首にさされた留金と聞いてイオカステは言いようのない恐怖におそわれた。そして、彼女はこれ以上の追求をやめるようにとオイディプスに哀願する。

だが、オイディプスは狂気のようにいきり立った。自分の正体をつきとめること、自分のアイデンティティーをつきとめること以上に人間にとって切実な強い要求があろうか。真実を知ったために王位をすてることになっても仕方がない。そのためにどのような悲惨がふりかかっても仕方がない。イオカステは恐ろしい真実を求めてたけり狂うオイディプスにもはや言うべき言葉がなく、しおしおと舞台から消える。

そこへ呼び出された老羊飼が登場する。そして、驚いたことに、コリントスの使者はかつてキタイロンの山中でこの老羊飼と会ったことがあると言う。老羊飼は初めのうちは知らぬ存ぜぬと言い張ったが、問いつめられるとついに幼児をその使者に渡した事実をオイディプス王の面前で自白する。

オイディプス「誰からその子を受け取ったのか」

羊　飼「その子は成人すると父を殺害する運命にあると予言されたので、ライオス王にその子をキタイロンの山中で殺すことを命じられたのですが、あまりのいたわしさに手をくだしかねている時にこの者に会い、遠い国で育てられれば大丈夫と思ってこの者に手渡したのです。私はこのことを今日まで誰にも口にしたことはありません。オイディプス様、あなた様が本当にあの時のお子さんでおありでしたら、あなた様ほど不幸な運命を背負われた方はありません」

オイディプス「すべてが明らかになった。わしが手にかけたあの旅人はまさしくわが実の父ライオス王だったのだ。光よ、わしがそなたを見るのはこれが最後であろう。わしは生れてはならなかったのだ。わしは交わってはならない女と交わり殺してはならない人を殺してしまった。この呪われたる男」

なにも知らずに実の息子と交わり、実の息子との間に四人の子供まで儲けたイオカステは恐ろしい事実に絶望して寝所にこもって自ら命を断った。オイディプスは母であると同時に妻である彼女の死体の前に立って動物のようにうめき、彼女の着物から抜き取った金のピンで自らの両眼をつき刺してくら闇の人となる。（ギリシア劇では舞台で血を流すことは許されない。この場面は目撃者によって報告される。）

盲目のオイディプスは従者に手を引かれて御殿からよろめきながら現われる。コロスがオイディプスの不幸をあわれんで、悲しみをいよいよ深いものにする。この最後の場面でイオカステとの間に生れ、父と母を一時に失った二人の娘、――オイディプスの娘であると同時に妹でもある――アンティゴネとイスメネが舞台に現われて悲哀感をいっそう強める。

今は王位をすて、盲目の人となったオイディプスは娘たちをクレオンに托してテバイをあとに従者に手を引かれて、

放浪の旅に出るのだった。

そして最後のコロス――「されば死すべき人間の身について、なんの苦しみにあうことなく生を終るまで、その人は幸福であると呼ぶことはできない。」

われわれの身の上に、明日何が待ち受けているか誰にもわからない。このことは今も昔も変ることのない人間存在の根源的事実だ。オイディプスは一度は明君と仰がれ、人々の羨望のまとであった。しかし、今は彼は運命の気まぐれにほんろうされて、住むに家なく永遠の闇をさまよう身の上となった。運命の女神が予め定めたことは人間がどんなに回避しようとしても結局実現するのだ。テレシアスも羊飼も、善意に基づいてオイディプスをかばうために事実を語ろうとしなかったのだが、神が定め給うたことは行なわれ、その事をかくしおおすことはできない。

以上ソポクレスの作品によってオイディプス王の悲劇の筋をたどった。

オイディプスもあわれであるが、イオカステもあわれだ。また二人の娘たちもあわれだ。古代ギリシアの観客の反応が手に取るようにわかるような気がする。神々を恐れよ！　その救いのない暗さ、人間の無力さ、これが人間存在の一つの真実の姿なのであろう。

現代は神々の時代ではなくて人間の時代であると言われる。そして人間の浅はかな高慢と限度を知らない利己主義がはてしない悲喜劇を生みつつあることも確かだ。ギリシア悲劇にふれて、何ものかに対する畏敬の感情を、一時的にもせよ、回復することは、われわれ高慢な現代人にとって価値のある経験ではないだろうか。たしかに、これはわれわれにとって随分かけ離れた世界である。しかし、人間はかつてこうした世界に住んでいたのだ。そして、この古代精神の真髄ともいうべきものがソポクレスのこの作品のなかに驚くべき芸術的完成度をもって描き出されていて、

今日のわれわれにも容易に理解できるということはありがたいことだ。われわれはこれを読むことによって、過ぎ去ったもう一つの世界を経験することができるのだから。

それはそれとして、古代ギリシア人がその後のオイディプス、アンティゴネとイスメネの行く末、さらには二人の兄弟エテオクレスとポリネケスの運命に深い関心をよせたことは当然であろう。カドモス家に取り付いた呪いはまだ続くのであった。

以下ソポクレスとアイスキュロスの作品によってカドモス家に降りかかる悲運を手短にその結末までたどることにする。

ソポクレスの「コロノスのオイディプス」はオイディプスが姉娘アンティゴネに手を引かれて諸国を放浪し、乞食のような姿でアテナイ領のある神域の森にたどり着いたところから始まる。

テバイの宮廷で起こった異常な事件は全ギリシアに知れ渡っていたので、二人はゆく先々で汚らわしいものとして追い立てられたが、心ある人々からは深いあわれみをもって見られた。しかし、オイディプスは気力のないおいぼれ老人として現われるのではない。神々に対して一言もうらみがましいことは言わないが、彼は強い信念に支えられていた。なるほど彼は恐ろしい罪を犯した。しかし、その罪は彼が意図して行なったものではない。彼こそ罪をおかされた者だという意識が彼を支える力だった。

そして、苦しい放浪の間も彼は彼を追放した者たち、クレオン、二人の息子、ポリケネスとエテオクレスに対する激しい怒りを胸中にたぎらせていた。ゴネリルとリーガンに裏切られて嵐の荒野でたけり狂うリア王のエネルギー、その抜群のエネルギーによってリア王はわれわれの目に王者の威厳を保ちつづけるのであるが、盲目のオイディプス

もまさにリア王的気力をもってわれわれの心を打つ。

国を追われて落ちぶれた盲目の父にまめまめしく仕える悲運の娘アンティゴネ、アンティゴネの身の上を思って、やさしくいたわるオイディプス。再びシェイクスピアーを持ち出すならば、悲劇の終幕に見られるリアとコーデリア。これらは父と娘の深い心の結びつきを描くもっとも美しく哀しい不朽の二つの場面であろう。リア王の不幸は自らの愚かさが招いたもの。オイディプスの場合はちがう。彼の不幸は神々から与えられた運命であったのだ。そのいずれがより恐るべきものであるか私は知らない。

オイディプスとアンティゴネが森で疲れを休めていると、意外や意外、妹娘イスメネが従者を伴なって現われる。三人はしばし抱き合って再会をよろこぶ。

オイディプスはイスメネに向って「なにゆえに、ここへ参ったのか。さだめし重大なわけがあるのであろうな」

イスメネ「お仰せの通りでございます。なにのたたりか存じませぬが、いまわしい兄弟の争いが始まったのです。エテオクレスは兄ポリネケスの王位を奪い、兄をテバイから追放してしまいました。ポリネケスはアルゴスで同志を集めテバイ攻めの計画を進めているとのことでございます。神託によりますと、父上の身柄を引き取った側が勝つのだそうです。まもなくクレオンがやって来るでしょう。父上を拉致するために。私が参ったのはそのことをお知らせするためでございます」

これを聞いてオイディプスはエテオクレスとポリネケスを呪い、兄弟が戦いの場で顔を合わせるならば、両者は共に命はないものと思えと予言する。

そのとき、アテナイ王テシウスが領内にオイディプスが留まっていることを聞いて登場。深遠かつ寛容なテシウス

はオイディプスの身の上を深くあわれみ、オイディプスがアテナイ領に留まることを希望するならば、進んで避難所を提供すると約束して、不幸な親子をよろこばす。

やがてイスメネの言葉通りクレオンが一隊の部下をつれて乗り込んできて、二人の娘たちをさらい、オイディプスをむりやりに引き立てようとする。テシウスの命令を受けたアテナイ市民兵が馳せ集って三人を無事クレオンの手から救出する。オイディプスはテシウスに感謝し、神々に向ってアテナイの繁栄を祈る。

クレオンが退却すると代ってポリネケスが現われる。「自分はテバイに攻め入ってエテオクレスから王位を奪い返すために、すでにアルゴスで六名の武将を味方につけた。神のお告げによると父上が味方する側に勝利があるとのこと。戦いに勝った上は父上にあらゆる孝養をつくすつもりですから、ぜひとも私と同行して頂きたい。」

オイディプスの心は氷のようにひややかだった。そして「兄弟戦って共に死ぬるがよい。これがわしの呪いであるぞ」と言い放つ。

二人の姉妹はポリネケスにテバイ攻めの計画を思いとどまるようにたのむが、ポリネケスはたとえ父の支持がなくても自分はあとに引くことはできないと言い放って去る。それと知りつつ破滅の道を急ぐのも人間の一面であろう。

「生れないことが一番よかったのだ。
つぎによいことは速やかにこの世を去ること」

とコロスは歌う。

オイディプスの気力が急に衰え、ゼウスの使いである雷鳴とどろくなかでオイディプスは静かに身体を洗い清めた。そして、この悲運の男についに安らかな死が訪れた。

「今や彼はついに生から解放された。
友よ、悲しむのをやめよ……」
再びコロスの声。
これはわれわれにとって大きな安堵だ。死がわれわれを安堵させる。オイディプスの場合は死は本当の生よりの解放だと思う。
アンティゴネはテシウスにたのんだ。「私たちをテバイに帰していただきたい。兄弟の上にさし迫っている破滅を私たちの力でふせぐことができるかもしれませんから」
テシウスがアンティゴネとイスメネをテバイに送り届けることを約束して、「コロノスのオイディプス」は終る。
舞台は再びテバイ。「テバイ攻めの七将」の筋書きは「コロノスのオイディプス」で予告されている通りに進行する。しかし、ここで注意しなければならないことは、われわれが所有している「テバイ攻めの七将」はソポクレス自身の続篇ではなく、先輩に当たるアイスキュロスの作品だということだ。このことは、カドモス家の悲運を物語る神話はギリシア人の間で当時すでに広く知られた共有財産になっていて、個々の作者が勝手にその筋書きを変えることは許されなかったことを意味する。作者の腕の見せどころは同じ材料をどのように扱い、どのように肉付けするかにあった。
アイスキュロスの作風はソポクレスやエウリピデスの作風とすこし違うところがある。そこには詩人アイスキュロスの個性とは別に、時代の違い、ギリシア悲劇の成長発達に伴なうドラマトゥルギー上の変化という問題があるようだ。そして残念ながら私にはそのことに深入りする用意はない。ただ言えることは、ギリシア悲劇最盛期の明けの明

星ともいうべきアイスキュロスの作品には一種の古めかしさが残っているということだ。そして、その古めかしさがアイスキュロスの作品にまたとない美しさと壮重さを与えている。登場人物の数はすくなく、コロスの占める割合がソポクレスやエウリピデスの作品よりもはるかに大きい。

アイスキュロスの「テバイ攻めの七将」は詩劇として最高のものの一つであろう。それが余りにもすぐれているので、後につづいたソポクレスは同じ材料を用いて自分の手で新たに「テバイ攻め」を書く気にならなかったのではないかとさえ想像される。

そのすばらしさを解説で伝えようとしても無駄だ。テキストを読んでもらうほかはない。したがって、ここではその荒筋だけを手短に述べるにとどめる。

兄ポリネケスを追放してテバイの王位についているエテオクレスはテバイ軍の総大将として指揮に当っている。伝令がポリネケス軍の押し寄せてくる有様を伝える。テバイの城壁には七つの門があった。エテオクレスは配下の部将に六つの門をかためさせ、彼自身は第七の門を引き受ける。ポリネケスもまた六人の部将をそれぞれの門にさし向け、自ら第七の門を攻撃することになった。復讐の神のはからいによって兄弟は一つの門をはさんで戦うのであった。

戦局はテバイ軍に有利に働いて侵入軍を撃退するが、エテオクレスとポリネケスはオイディプスの予告通りに兄弟刺しちがえて斃れる。

あとは二人の兄弟を一時に失ったアンティゴネとイスメネの深い悲しみと、その深い悲しみをいよいよ深いものにするコロスの哀号。

そしてこの悲運の一家の最期はソポクレスの「アンティゴネ」によって物語られる。

オイディプス王の遺児ポリケネスとエテオクレスが亡き者となった今テバイの支配権は当然のことながら両人の叔父クレオンに握られた。

クレオンは、エテオクレスの遺骸を丁重に葬ったが、テバイ攻めを企てたポリネケスを激しく憎んで、その遺体の埋葬をかたく禁じ、この禁令をおかす者は何人であれ生かしておかないと布告した。死者の遺体を原野にさらして鳥や野獣がこれを食らうにまかせることは、死者に対する最大の冒瀆、死者に対する最大の侮辱、最大の敵意の現われであった。遺体の取り扱いがギリシア人にとってどんなに重大事であったかということはソポクレスのもう一つの作品「アイアス」によっても知られる。アイアスの遺骸を埋葬するか野ざらしにするかをめぐるメネラウスとオデュッセウスの激論がこの作品の主題である。そしてついにオデュッセウスの主張が通りアイアスは型通り埋葬されることになってわれわれを安堵させる。われわれはわれわれのなかにも人間の遺体に対する厳粛な畏敬の感情が強く残っていることを意識する。この点では古代人も現代人も変るところはないのではなかろうか。しかし果してそういうことが言えるだろうか。死体遺棄の記事を新聞で見入るたびに私は恐れる。何かを恐れる。

アンティゴネは兄ポリネケスの遺体が野ざらしにされているのを見るにしのびず、イスメネをさそって兄の遺体を埋葬することを決意する。おとなしいイスメネはクレオンの厳しい布告にそむくことをためらい、姉の無謀をいさめるが、思いつめたアンティゴネの決心は変らない。

気性の激しい姉アンティゴネとおとなしいイスメネの性格的なちがいは同じ作者の「エレクトラ」のなかのエレクトラとクリソテミスのちがいにも反復されていて、おとなしいイスメネとクリソテミスはアンティゴネやエレクトラの気性の激しさを引き立てる役目を果していると同時に、父を失って窮地におかれた若い娘たちのあわれをいよいよ

深いものにする。

アンティゴネはポリネケスの遺体を埋葬している現場を発見されてクレオンの前に引き立てられる。冷静に死を覚悟しているアンティゴネ、激怒するクレオン、アンティゴネの婚約者であるクレオンの息子ハイモンはアンティゴネを弁護して父とはげしく争う。

洞穴に投げ込まれたアンティゴネ、オイディプスとイオカステの悲運を思い起こす彼女の哀切をきわめる独白と彼女をあわれむコロス。

怒り狂って理性を失ったクレオンは予言者テレシアスの忠告を受け入れない。しかしテレシアスの言うことを聞いていたテバイの長老たちが、この上テバイを襲うかもしれない災いを避けるためにポリネケスを正式に埋葬し、アンティゴネを自由の身にすることを強く訴えたので、さすがのクレオンも折れる。

しかし、遅すぎた。伝令が、洞穴のアンティゴネが自ら生命を断ったこと、そして彼女の足もとにハイモンが倒れ臥していることを伝える。これを聞いて恐れ絶望するクレオン、彼もまた所詮生きのびることはできない。

こうしてカドモスの家は亡びた。

私はさきにギリシア悲劇を読むことによって過ぎ去った時代を非常にいきいきと追体験することができるという意味のことを書いた。すなわち、われわれは現代に生きながら神々が生きていた古代の精神をかいま見ることができる。自我を世界の中心に据えて、自己の恣意を絶対化する現代の生き方と、人間のよろこびと悲しみのすべてを神々に帰する古代の生き方――この二つの生き方の対照は鮮烈である。そして、そのいずれがよりよいかということは、も

ちろん誰にも言えない。また神々の時代を恢復することができるなどとも私は思っていない。

しかし、自我の絶対化、すなわち自我を神とみなす現代の生き方は随分身勝手な、危険きわまる生き方であると古代人は感じないであろうか。自我の絶対化が正しいものであり、可能であると思っているところに現代の最大の盲点があるのではないだろうか。

秩序のないところに美はない。古代人は確固たる神々の秩序のなかに生きていた。現代を見まわすと、破壊された秩序のなかに生れ育って自我を神とみなす破壊された精神が破壊された秩序をさらに破壊するためにあせりにあせっているのではないかとさえ思いたくなる。このような現代がやがて調和と秩序を生み出すとするならば、われわれは矢張り目に見えない神の手を予定するほかはなさそうだ。

古代の精神は現代にそのことを指し示しているように思う。げに古代は現代の鏡である。

下島　連

〈邦文テキストおよび参考書目〉

テキスト

岩波文庫版

筑摩書房版「ギリシア悲劇」

人文書院版「ギリシア悲劇全集」

（いずれも作品ごとに訳者によるかなり詳しい解説がついている）

参考書

高津春繁「ギリシア文学論集」（筑摩書房）

中村善也「ギリシア悲劇入門」（岩波新書）

久保正彰「ギリシア思想の素地」（岩波新書）
山内登美雄「ギリシア悲劇―その人間観と現代」（ＮＨＫブックス）
藤縄謙三「ギリシア神話の世界観」（新潮選書）